

検定成績表の様式AとBには「移動13ヵ月成績」があります。これは牛群構成、搾乳牛1頭平均、体細胞数、授精状況、管理状況(空胎日数・乾乳日数)からなり、各立会月毎の成績の他、年平均と前年成績が表示されています。このなかでは、収益に直結する「搾乳牛1頭平均」の乳量などに目が行きがちですが、今回は「牛群構成」に注目してみましょう。

「牛群構成」のうち、「経産牛と搾乳牛の頭数」は生乳生産量を左右する構成要素です。その増減は繁殖成績と関連しており、授精状況や管理状況が良ければ選抜や淘汰による頭数のコントロールが容易となります。さらに経産牛と搾乳牛の比である「搾乳牛率」は牛群の稼働率を示しており85%強が望まれます。この割合が低いと遊んでいる牛が多く、牛群として効率が良い状況とは言えません。逆に90%以上になると繁殖成績が遅延している牛群に多く見られ、これも効率が良いとは言えない状況です。

「搾乳牛率」に加えて泌乳最盛期の牛が多いか否かの目安となる「搾乳日数」も大切です。160日の目標値へと近づけることで「搾乳牛1頭平均」の乳量の伸びが期待できます。

検定成績表の牛群の成績には、平均経産牛頭数、平均搾乳牛頭数や経産牛1日1頭当り乳量、搾乳牛1日1頭当り乳量があります。このなかでは、収益に直結し、牛の生産指標として把握しやすい搾乳牛1日1頭当り乳量などに目が行きがちですが、今回は牛群の構成に注目してみましょう。

経産牛頭数と搾乳牛頭数は生乳生産量を左右する牛群の構成要素です。その増減は繁殖成績と関連しており、授精状況や管理状況が良ければ選抜や淘汰による頭数のコントロールが容易となります。さらに「搾乳牛率」＝ $\text{搾乳牛} \div \text{経産牛} \times 100$ を計算してみましょう。これは牛群の稼働率を示しており85%強が望まれます。この割合が低いと遊んでいる牛が多く、牛群として効率が良い状況とは言えません。逆に90%以上になると繁殖成績が遅延している牛群に多く見られ、これも効率が良いとは言えない状況です。「搾乳牛率」に加えて泌乳最盛期の牛が多いか否かの目安となる検定管理情報の「平均搾乳日数」も牛群の構成を示す指標として大切です。160日の目標値へと近づけることで搾乳牛1日1頭当り乳量の伸びが期待できます。